

畑雑草の幼植物 (5) ヒユ類

(独)農業・食品産業技術総合研究機構 中央農業総合研究センター 浅井元朗

ヒユ科ヒユ属 *Amaranthus* の雑草をまとめてヒユ類と総称される。ヒユ属はイヌビユの群とアオゲイトウの群に大別される。畑地雑草として代表的なのはイヌビユ *A. blitum* とホナガイヌビユ *A. viridis* である。後者はアオビユと記されることもある。しかし、アオビユという和名は、ホナガイヌビユとアオゲイトウ *A. retroflexus* の両種に使われた経緯がある。そのため、現在でも両種が混同されている図鑑が多い。アオゲイトウの群の畑地雑草にはアオゲイトウ、ホソアオゲイトウ *A. hybridus*、ハリビユ *A. spinosus*、イガホビユ *A. powellii*、オオホナガイアオゲイトウ *A. palmeri* などがあるが、ハリビユを除き識別が難しいため、普及向けの図鑑でこれらの写真が正確に掲載されていることはまだ少ない。ここではおもにイヌビユ類について解説する。

ヒユ類の子葉は基部に近い部分が最も太く、無毛で中央脈が明らかである。表面には網目状のしわがある(写真-1:イヌビユ, 写真-2:ホナガイヌビユ)。しばしば同所的に生えるシロザの幼植物とはこの点で識別できる(写真-3)。イヌビユの子葉は長さ約7mmで、ホナガイヌビユに比べやや大きい。イヌビユ幼植物の裏面は薄赤色をおびる(写真-4)。

イヌビユの本葉は広卵形で先が凹み、縁はやや波打つ(写真-5)。一方、ホナガイヌビユの本葉は卵形～三角状卵形で、先端の凹みはイヌビユに比べて小さい(写真-6)。両種とも葉身

の展開とともに葉柄は長く伸びる。

ホナガイヌビユは主茎が直立し、茎の基部から分枝を四方に広げる傾向がある(写真-7)のに対し、イヌビユの茎は斜上し、地を這うように伸びる(写真-8)。イヌビユの開花時の草高は膝丈程度だが、ホナガイヌビユは腰の高さ以上となる(写真-9)。両種とも花弁のない小さな花を密集してつける。イヌビユが茎頂や葉腋に10cm以下の黄緑色の花穂をつけるのに対し(写真-10)、ホナガイヌビユの花穂は茶褐色で、10cm以上あり、茎の上部に多い(写真-11)。開花期もイヌビユの方が少し早いようである。両種の国内分布や作付体系、除草剤に対する反応には何らかの違いがあると思われるが、あまりよく分かっていない。

アオゲイトウの群で、近年、日本の畑地で最も多い草種はホソアオゲイトウと思われる。開花時の草高は2mに達し、大型で、夏作物の強害雑草である。イヌビユ類と異なり、花穂の苞が花被片より長いので、花穂全体がとげとげしく見えるのが特徴である(写真-12)。幼植物期から本葉の表面、葉柄、縁などに毛があり(写真-13)、葉の裏面は赤みをおびる(写真-14)。幼植物期の葉は卵形で先の凹みが目立つが、生育が進むとひし状卵形となり、らせん状に葉を配置する(写真-15)。茎は直立し、茎の表面や葉の裏面に縮れた毛があることがイヌビユ類との識別点になる。アオゲイトウ類の識別については別途記述したい。



写真-1 イヌビユの子葉



写真-2 ホナガイヌビユの子葉



写真-3 右: ホソアオゲイトウ
左: シロザの子葉



写真-4 イヌビユの幼植物裏面



写真-5 4葉期のイヌビユ



写真-6 3葉期のホナガイヌビユ



写真-7 ホナガイヌビユの生育期



写真-8 開花始期のイヌビユ



写真-9 開花期のホナガイヌビユ



写真-10 イヌビユの花穂



写真-11 ホナガイヌビユの花穂



写真-12 ホソアオゲイトウの花穂



写真-13 3葉期のホソアオゲイトウ

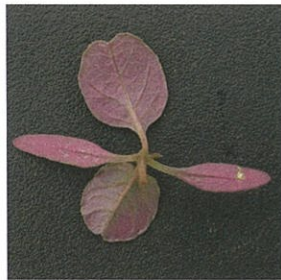


写真-14 ホソアオゲイトウの幼植物裏面



写真-15 ホソアオゲイトウの生育期